

保育観による保育行動の違い

渡邊 望・永利 陽一

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2017年10月31日受付 2017年11月24日受理)

要 旨

「教育は人なり」というように、教育における教師の役割は重要である。その影響は年齢が低いほど大きいといえる。幼児教育は環境を通して学ぶ教育である。平成29年3月3日に幼稚園教育要領が公示されたが、その基本姿勢は変わらない。本研究は人的環境としての保育者に焦点を当て、その保育観がどのように保育行動に影響を与えているか明らかにしようとしたものである。

1 研究背景と目的

1 研究の背景

平成29年3月に幼稚園教育要領、小学校及び中学校の学習指導要領が告示された。

それによると育成すべき資質・能力の具体的内容は、①何を知っているか・何ができるか(個別の知識・技能) ②知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力など) ③どのように社会・世界とかわかり、より良い人生を送るか(学びに向かう力、人間性など)の「三つの柱」を中心に構成され、教科の内容をどのように学ぶのかに関して「アクティブ・ラーニング」を強調し具体例を示すなど学習方法にまで言及している。

一方幼稚園教育要領では、幼児教育において育みたい資質・能力とともに幼児期にふさわしい評価の在り方について幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として10項目を挙げている。この10項目の育成は5歳児だけではなく、3,4歳児においても、念頭に置きながら5領域にわたって指導が行われることが望まれている。また、現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直しとして非認知能力の育成にも言及している。非認知能力の育成に関しては、その後の生きる力の育成に大きくかかわってくる事が明らかになるなど、小学校教育の土台としての幼児教育がますます重要となってきた。いうまでもなく、幼児教育の充実には、保育者個人の資質能力にかかっているところが大きい。しかし、働く女性の急増、都会への子育て層の集中などから保育所不足が起きており、保育士の質の低下が懸念されているところである。

2 本研究の目的

幼児教育は環境を通して行うことを基本とする。今回の改訂にあたっては、幼児の自発的な活動としての遊びを中心とした生活を通して総合的な指導を行うという幼児教育の基本姿

勢は変わらない。環境には物的環境、人的環境、自然や社会の事象があるが、人的環境としての保育者の役割、保育者のとる行動はますます重要となってきた。保育行動は保育者よりの保育であるか、子ども側の保育であるかの違い、保育者の価値観の違い、子どもを見る枠組みの大きさなど一人一人の保育観、子ども観によって違いが出てくる。保育の質の向上のために、保育者のどのようなタイプによりどのような保育行動の違いが出てくるのか、幼児教育を担う保育者の課題は何かを調査研究したいと考えた。

II 研究方法

1 アンケート調査

(1) 対象者 A幼稚園 教諭12名 B幼稚園 教諭13名 合計25名

(2) 調査内容

・保育観についての質問紙調査

(3) 手続き

平成29年9月にアンケート調査の依頼と配布、10月に回収、分析を行った。

2 保育分析

(1) 対象者 A幼稚園担任教諭6名

(2) 調査内容

設定保育、自由保育など、一日の様々な場面をビデオに収録、教師の支援・援助と子どもの活動を分析し、保育観による保育行動の違いと児童の反応について観点を決め検討を加えた。

III アンケート調査の結果と考察

保育観の調査は、梶田、後藤、吉田¹⁾、中²⁾の保育者の保育観の調査項目を参考に行った。ここでの保育観は、子どもの認識観、発達観、指導観、保育内容観、保育者の人生観などを含むものである。アンケートでは、相対する項目ア、イを置き自分に近いものを挙げてもらい、どちらともいえない場合はウ（どちらともいえない）に回答するようにした。

(1) 第1因子（教師中心－子ども中心）

①項目内容

項目1

ア すべての子どもがなるべく等しい経験や活動をするように指導する。

イ それぞれの子どもがその特性に応じた経験や活動をするように指導する。

ウ どちらともいえない。

項目2

ア うまく遊べるように、教師がルールをつくったり考えたりして方向付ける。

イ 子ども自身が遊びを考えたりルールをつくって遊ぶのを見守る。

ウ どちらともいえない。

項目3

ア 造形などでは、はじめに教師が丁寧に計画し、それにそって指導する。

イ 造形などでは、課題の大枠だけを決め、あとは子どもの自主性にまかす。

ウ どちらともいえない。

項目4

ア ケンカが生じたとき、教師が直ちに入って解決する。

イ ケンカが生じたとき、子どもに解決を任す。

ウ どちらともいえない。

項目5

ア 笛などの楽器の演奏がうまくできるように指導する。

イ うまく演奏できるよりも、音楽そのものを楽しむように指導する。

ウ どちらともいえない。

項目6

ア 子どもが互いの気持ちを配慮して譲り合うように指導する。

イ 子どもが自分の気持ちや要求を素直に主張できるようにする。

ウ どちらともいえない。

項目7

ア 子どもの協調性を育てる。

イ 子どもの独自性を育てる。

ウ どちらともいえない。

項目8

ア 遊びが盛り上がっても時間をきちっと守る。

イ 遊びが盛り上がってれば遊びを優先する。

ウ どちらともいえない。

②結果と考察・傾向分析

表1 第1因子(教師中心-子ども中心)

(人)

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	計
ア	5	3	6	2	0	9	10	4	39
イ	14	12	10	2	11	3	2	8	62
ウ	6	10	9	21	14	13	13	13	99

考察

イの解答が多く、全体としては子ども中心の保育が行われていることがわかる。ただ、クラス別にみても、年少、未就園児クラスのように年齢が低いクラスでは、やや教師中心の保育の傾向が表れている。教える事柄が多いことから教師中心となっていると思われる。4項目（ケンカの時の対応）は教師が解決すると、子どもに任せるがそれぞれ2名ずつおり、他の21人はどちらともいえないと回答している。ケンカの程度であり物を持つてのケンカや、危険な場合は安全を優先していることが伺える。それ以外の項目では回答に大きな差（ウを除くとア、イのどちらかに回答が偏る）が見られた。

6項目、7項目はイよりもアの解答が多く、それ以外はすべて子ども中心という回答であった。6項目では子どもが自分の気持ちや要求を素直に主張できるようにする（3人）よりも、互いの気持ちを配慮して譲り合うように指導する（9人）と回答した教員が多く、7項目の子どもの協調性を育てるとの回答（10人）と合わせると、思いやりがあり協調性を持った子どもを育てる保育観の指向があることがわかる。

第5項目、楽器の演奏がうまくできるように指導するという回答は0人で、楽しく指導するが11人であった。どちらともいえないの解答は14人であり、日常の演奏では十分に楽しませるが、発表会などの行事に向けては、演奏を成功させたい、達成感を大事にしたいという保育観の表れであろう。

(2) 第2因子（結果重視－過程重視）

①項目内容

項目1

- ア 失敗しないように慎重に取り組むように指導する。
- イ 失敗してもいいから積極的に取り組むように指導する。
- ウ どちらともいえない。

項目2

- ア 音感や情感よりも言葉や数がわかるように指導する。
- イ 言葉や数よりも音感や情感を育てるように指導する。
- ウ どちらともいえない。

項目3

- ア 造形ではよい作品が出来上がることを目標にして指導する。
- イ 造形では作品の出来栄よりも、活動を楽しむように指導する。
- ウ どちらともいえない。

項目4

- ア 運動遊びではうまくできることを目標にして指導する。
- イ 運動の出来栄よりも運動を楽しくするように指導する。

ウ どちらともいえない。

②結果と考察

表2 第2因子（結果重視－過程重視） (人)

項目	1	2	3	4	計
ア	0	2	1	0	3
イ	20	7	18	15	60
ウ	5	17	6	10	38

考察

第1項目では圧倒的にイの回答が多かった。失敗を恐れずに積極的な行動をする指導、難しいことにもチャレンジして欲しいという保育観である。項目2の知識重視の指導と情操教育については情操教育が多いが、どちらともいえないの回答が17人も見られた。その時の状況で、どちらにもなりうるということがわかる。言い換えると、保育内容や環境、保育場面によって指導に幅があるということであり、時として言葉や数の指導も行っていることがわかる。造形活動（項目3）、運動遊び（項目4）ともに楽しく活動、運動をするの回答が多く、結果を求めるのではなく、楽しむことを重視する過程重視の保育観であることがわかる。

(3) 第3因子（子どもの興味・意欲重視－積極的な教師の働きかけ重視）

①項目内容

項目1

- ア 男の子も女の子も区別せずに指導する。
- イ 男の子らしさ、女の子らしさを伸ばすように指導する。
- ウ どちらともいえない。

項目2

- ア 文字や言葉の学習は子どもの意欲に任せる
- イ 文字や言葉の学習を積極的に進める。
- ウ どちらともいえない。

項目3

- ア いろいろ活動に取り組みせ、なるべく幅広い体験を与えたほうがいい。
- イ 体験の幅は狭くても、一つのことじつくりと取り組ませた方がいい。
- ウ どちらともいえない。

項目4

- ア 少々時間がかかってもきちんと正確にできる子を育てることが大切だ。
- イ 少々おおざっぱでも、てきぱきやる子に育てることが大事だ。

ウ どちらともいえない。

項目5

ア 鉄棒やマットなどの運動では、うまくできるよりも、子どもが興味を持てればいい。

イ 鉄棒やマットなどの運動では、子どもがうまくできることが大切だ。

ウ どちらともいえない。

項目6

ア 子ども同士で遊ばせ、教師は見守るように努める。

イ 教師も子どもの中に入って一緒に遊ぶ。

ウ どちらともいえない。

②結果と考察

表3 第3因子(子どもの興味・意欲重視-積極的な教師の働きかけ重視)(人)

項目	1	2	3	4	5	6	計
ア	17	11	18	14	15	1	76
イ	1	2	1	0	0	16	20
ウ	7	12	6	11	10	8	54

考察

アの回答が一番多かったのは項目3(幅広い体験)であった。幼児期はいろいろな体験を積み重ねていくことで学んでいくので、一つのことにじっくり取り組ませるよりも幅広い活動をさせたいという思いであろう。項目1の性差を意識した指導については、男の子も女の子も区別せずに指導するが、17人(68%)の回答であり、性差が見られない幼児期だけに男女を意識しないで指導をしていると思われる。文字や言葉の学習では、どちらともいえないの回答が、12人(48%)も見られ、状況に応じて指導するなどの対応を行っていることがわかる。

(4) 第4因子(集団指向-個人指向)

①項目内容

項目1

ア 一人一人の子どものペースよりも、クラスのとまりを大切にする。

イ クラスのとまりよりも一人一人の子どものペースを大切にする。

ウ どちらともいえない。

項目2

ア 「いただきます」「ごちそうさま」はクラス全員そろって言う方がよい。

イ 「いただきます」「ごちそうさま」はそれぞれの子どもに任せる方がよい。

ウ どちらともいえない。

項目3

ア 嫌いな食べ物でも栄養のバランスをとるためできるだけ食べさせる。

イ 極端な偏食でなければ、嫌いな食べ物があってもかまわないので無理に食べさせない。

ウ どちらともいえない。

②結果と考察

表4 第4因子(集団指向-個人指向)(人)

項目	1	2	3	計
ア	3	17	8	28
イ	2	2	7	11
ウ	20	6	10	36

考察

第4因子、項目3の偏食指導はできるだけ食べさせるが8人(32%)と、無理に食べさせないが7人(28%)と別れた。栄養バランスを考えたら、できるだけ食べさせた方がいいが、無理強ひすることで幼稚園そのものが嫌いにならないようにとの考えで迷っていると思われる。第2項目の「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶はクラス全員そろって言う方がいいと考えている教師は、17人(68%)に上った。クラスとしてまとまってほしいという保育士の願いが表れており、年少児でも大事にしていることがわかる。

(5) 第5因子(のびのび重視-しつけ・安全重視)

①項目内容

項目1

ア 各々の子どもの食欲に合わせて食べた方がよい。

イ 用意された食事は、基本的に残さず食べた方がよい。

ウ どちらともいえない。

項目2

ア 基本的生活習慣のしつけよりも、楽しみながら食事をした方がよい。

イ 食事を楽しむのもよいが、基本的生活習慣は身につけられるように指導すべきだ。

ウ どちらともいえない。

項目3

ア 基本的生活習慣のしつけよりも、まず子どもが伸び伸びと活動するように指導する。

イ まず、子どもの基本的生活習慣をしっかりと身につけられるように指導する。

ウ どちらともいえない。

②結果と考察

表5 第5因子（のびのび重視－しつけ・安全重視）（人）

項目	1	2	3	計
ア	11	0	1	12
イ	10	20	12	42
ウ	4	5	12	21

考察

第5因子の第1項目（食欲に合わせて食べる－残さず食べる）はア、イの回答はほぼ同数であったが、第2項目（食事のマナー）、第3項目（基本的生活習慣）は圧倒的にイの回答が多かった。基本的生活習慣はきちんと指導、食事のマナーも大切にしたいが、子どもの食欲に合わせた食べ方がよいとも考えている。基本的マナー、生活習慣を身につけさせながら、その中で「のびのび育てたい」という保育観が見て取れる。

IV 保育分析

保育場面、生活場面を保育者の発問を中心に分析

1 A教諭（経験年数22年）

(1) A教諭の保育観

【過程重視－子どもの興味・意欲重視－しつけ・安全重視】

(2) 保育場面 【年長児10月】

①朝の活動

②設定保育

・題材 「忍者ごっこをしよう」

アねらい 「手裏剣を作り、的あてゲームを楽しむ」

イ内容 はさみの取り扱いに注意して楽しく手裏剣を作り、みんなでの的あてゲームを楽しむ。

(3) 保育記録

①朝の活動

【朝の歌・朝の話】

日曜日に行われた運動会で楽しかったことを6人の子どもたちがみんなの前で発表していた。「○○グループの△△です。僕（私）が楽しかったことは、○○です」というようなフレーズで一人ずつ、手作りのマイクを回しながら発表。「だるま転がしだって」「リレーの選手で走ったことがうれしかったんだって」など一人一人の発表を教師は繰り返しながら、発表の強化とサポートを繰り返す。終わると朝の歌、健康観察。朝の活動はルーティン化した活動であり、スムーズに終了。健康観察では、元気な声、手のあげ方を評価しながら進めていった。

②設定保育「忍者ごっこをしよう」

【導入】

忍者ごっこの導入のために、絵本（忍者の小太郎）の読み聞かせを行う。忍者歩きができるかなという教師の呼びかけに応じて、みんな静かに教師の周りに集まる。どの子もよく聞こえるように5列に並ぼうと指示し、きちんと並ばせ読み聞かせが始まる。教師の読み聞かせに子どもたちは集中して聞いていた。読み聞かせの後、内容についての確認を行う。「忍者かっこいいけれど、本当に忍者の真似をして木に登ったら危なかったよね。だからちゃんとルールを守って遊んだら遊びも楽しいよね。お話を聞いてね。はい、そういうお話でした。」ルールを守ることの大切さを一番に伝える。

【手裏剣づくり】

2色の色紙を折って、はさみで切り、それを組み合わせて手裏剣を作る作業を「聞いているかなみんな」「わかるかな意味」「また教えるからね」「できるかな」「まず何を取るのかな」等とときばきと指示を出しながら、進めていく。はさみを扱う場面では、「はさみ持ったまま危ないです」「はさみ気を付けてね」など、はさみの取り扱いに関する注意が数多く（9回）あった。また、手裏剣づくりに関しては、次の的あて遊びに自分の作った手裏剣を使うため、「半分にきれいに折ってね」「きちんと折ろうね」「きちんとピンッと合わせてアイロンをかけます」「今日のはさみにしてね（手でも切れるよという子どもの声に対して）」「ぐしゃぐしゃにならないようにちゃんと線を見て、線がついているのわかるね」等きちんと手裏剣を作るために細かく指示をし、子どもたちは教師の支援を仰ぎながら、（全員）完成させた。

【手裏剣での的あて遊び】

全員が手裏剣を完成させてから、的あてゲームが始まった。グループごとにきちんと並ばせ、「手裏剣は投げたり、お友達に当てないようにしてください」「それから電気とかに当てるとまた壊れちゃったりするし、それからお友達のお顔には絶対に当てないようにしてください」「的あてゲームを考えました。カエルちゃんが50点、クマさんが30点、猫ちゃんが20点と点があります。難しいところが50点です。」等ゲームをする前の注意、ルールから始まる。教師は、子どもたちが手裏剣を投げるのに、「惜しいね」「頑張れ」などの

声かけをやるがなかなか的に当たらないので、少し前に線を引き、当たりやすいようにして続行する。この間、「30点いきました。おめでとう」「投げ方がとっても良かったね」など励ましの言葉と「強さもあるね」「横から投げたほうがいいかな」などアドバイスを送る。

考察

A教諭は、アンケートのほとんどの項目で、ウ（どちらともいえない）を選択した。「すべての子どもがなるべく等しい経験や活動をするように指導する」の項目では、年少では、「それぞれの特性に応じた経験や活動をする」が、年長になると就学に向けて「子ども達に等しい経験や活動をさせる」が多くなると回答。また子どもの性質によって、「自分の気持ちを素直に主張するように指導する」のか、「譲り合う」のかは違って来るなど、年齢やその子の状況に応じた保育をすると回答した。ただ、しつけはきちんと指導、基本的生活習慣は身につけられるように指導すると回答。学年の発達に応じての指導、基本的生活習慣は大切にしながらも子どもの意欲重視の保育観が伺えた。

観察させていただいた場面は、①朝の活動、②忍者の手裏剣づくり、③手裏剣で遊ぶの3場面である。手裏剣づくりでは、次の活動につなげていくためにも、全員にきちんと完成させようという意図があり、この場面では、結果重視、積極的な教師の働きかけ、集団指向の保育がみられた。特に今回の保育がはさみを使う場面であったから、はさみの基本的な使い方重点がいった。安全重視は他の項目（子ども中心、興味・意欲重視）よりも何よりも優先された。また、手裏剣づくり、的あてゲームが50分の短時間で実施されたため、教師中心になっていったようである。ルールの大切さの指導、はさみに関する取扱いの指導などしつけ、安全重視の保育観が表れていた。

2 B教諭（経験27年）

(1) B教諭の保育観

【子ども中心－過程重視－子どもの興味・意欲中心－集団指向－しつけ・安全重視】

(2) 保育場面 【年長児10月】

①朝の活動

②設定保育

・題材「ハローウィンの飾りをつくろう」

アねらい ハローウィンを楽しみにし、飾りをつくる。

イ内容 はさみの扱いに気を付け、楽しく飾りをつくる。

(3) 保育記録

①朝の活動

みんなで集まりの挨拶を歌った後、前に出ている日直が、それぞれ自分の名前を言って

好きな食べ物を発表していく。何を発表するかはみんなの意見で決めている。「今日は何にする？」それに対し、「好きな色」「好きな食べ物」等元気な声上がる。「では今日は好きな食べ物にしましょう。お話を聞くときは？おしゃべりやめる？」近くの子に、「手は？」みんな「おひぎ！」「まず、お名前を言いましょう。」「梅組の〇〇です。」「好きな食べ物でもいいし、果物でもいいし、…。果物のなーに。」子どもから聞き、「では、サクランボです。」発表が苦手な子には細かく支援をしていく。子どもたちは順番に発表していく。その都度、他の子が「私も好き。」「好き、好き！」など口々に反応する。

みんなが静かになるまで待つて健康観察が始まる。しゃべりそうな子に「今お話を聞く時よね」と促す。また、大声を出した子に、「最後まで頑張れる？」と声かけをする。朝の歌が始まると子どもたちは体を揺らしながら元気に歌う。「女の子のお休みはどうでしたか？」「一人」「みんなで26人」「27人から一人お休みですから今日は26人ですね。なかなかそろわないですね。」そのあと今日頑張つて欲しいことなどの話をする。

②ハローウィンの飾りをつくろう

【導入】

昨日に続いての飾りつくりなので、昨日作った作品を見せながら話をする。スポンジで色を塗ったけれど、一つとして同じものはなくて出来上がりが楽しめという話をする。今日すること（色を塗った紙を線に沿ってきつてカボチャを作り、それに目と鼻を付け台紙に貼つて完成）を説明。はさみ、のり、道具箱をそろえることを指示し準備を促す。

【展開・まとめ】

準備ができ、はさみで切る作業に入る。「では説明します。」「待っている間はどのような？」「待っている間自由におしゃべりする？」子どもたち、「違う。」この後、説明を静かに集中して聞き作業に入る。友達同士「切つていいと？」「上にいっとるよ」「はや！私なんてここまでやん」「結構楽しい」等楽しく作業を進める。次に口と目、鼻の切り方を説明。「その切り方を教えるね。」子どもたち「簡単、簡単」と口々に反応。「切りにくいからさかさまにして、まず切り込みを2つ入れます。まだしないよ、切りやすいように今さかさまにしたからね。切り込みを縦に2つ入れます、そして横を切ると、ほら、でこぼこになります。お隣もこうするとほら（わーい、すごいと歓声上がる）、この切り方が難しいという人は、斜め、上斜め、上、斜め、上という風にするとギザギザのお口になります。お口はみんなに任せますので、でこぼこでもいいし、ギザギザでもいいし。お口は裏と表なので、2つできている。やってみてください。こういう切り方があるのよ。」次に目の作り方、鼻の作り方の説明。「この細長いのでお目目を作ります。お星さまのお目目、反対は自分でデザインしたものを作ってください。それではお鼻も、お鼻は表と裏の2つ分です。それができ貼つたらカボチャのお顔が出来上がります。お鼻を切つてもいいよ。三角を切るときはこの角を使うと便利です。ほら。なくならないように下に入れとく

のよ。ハートのお目目でもいいし。」「私ハートできない、ハートしたいんだけど。」星形、四角、三角、ハートなどいろいろな目ができる。出来上がったお友達や自分のお面を見て「怖い、」「これ怖くない。」「見せて、怖い。」「終わった?」「終わった。」など友達同士話が弾む。最後に教師が「牛乳パックの方にのりをつけて、仲良しさんになるようにくっつけてください。貼ったら手でしばらく押さえておくといいです。」と促し、作品を牛乳パックの台紙に貼って終了。

考察

朝の活動は、ルーティン化されたものだが、みんなの前で発表するという経験は苦手な子にとってはチャレンジであり、いい経験となる。聞いている子どもたちの反応がよく、発表を受け入れて自分の思ったことを活発に述べていた。子どもたちの否定的聞き方はなく、発表しやすい雰囲気となっていた。話の聞き方に対しての細かい指示、注意がなされていたが、年長であり小学校へ向けてのこの時期、集団指向、しつけ重視の保育観が表れていた。設定保育の中での造形活動、ハローウィンに向けての作品作り、その中でも色付け、目、鼻、口の作成に子どもたちの選択、自由活動を取り入れ、様々な表情のハローウィンのお面が出来上がった。

保育者の子ども中心ー過程重視ー子どもの興味・意欲中心の教育観が伺われた。「今、お話を聞くとときよね。」「頑張れるの?」「女の子の返事聞いていないよ。」「ちゃんとしっかり挙げて。」「〇〇君、どこに行っているのかな?」「待っている間ははどうするの?」「待っている間は自由におしゃべりするの?」(ほかの子が一斉に違う)などの指導に集団指向、しつけ重視の保育観が出ていた。

今回の実践記録は、設定保育の場面であったため、本来の個人が持っている保育観が現れにくいところがあったように思われた。自由活動の場面であれば、保育者の保育観が場面の出来事に対する対応、子どもへの対処など現れるのではと思う。保育者の指導は設定保育ではルーティン化していて6クラスの学級の実践を記録したが、同じパターンで指導が行われていた。時期的にハローウィンの飾りをつくるという保育であり、作品を作るという場面であったため、余計にルーティン化したと思われる。ただ同じルーティン化した設定保育でも子ども達の反応は大いに違っていた。クラス固有の雰囲気が出ていた。それは保育者の保育の結果でもあるので、子どもの姿から保育者の指導の検討を加えていくとより一層保育観が明らかになると思われた。

V 総合考察とまとめ

【アンケートからの考察】

全体として、子ども中心ー過程重視ー子どもの興味・意欲重視ー集団指向ーしつけ・安全

重視の保育観が見られた。個人を見ていくと、経験10年目までの教諭で教師中心の保育観と回答した人は4人(36%)、子ども中心と回答した人は5人(45%)であり、子ども中心と教師中心が同数となった人が2人(18%)であった。全員が子ども中心とはならなかった。10年以上の保育者では、教師中心の保育観が3人(21%)、子ども中心が10人(71%)どちらともいえないの回答が1人(7%)となり、経験を積むに従い、子ども中心の保育観となっている。他の項目では有意な差はみられなかった

今回2つの園でアンケートを実施したが、1つの園では「子ども中心—過程重視—子どもの興味・意欲重視—集団指向—しつけ・安全」の保育観に新任の保育者を除いてまとまっており、同じ方向で保育が行われていた。もう一つの園では、一人一人にかなりの違いが見られ、また「どちらともいえない」との回答は少なく、保育に対する考えがはっきりしていて保育者の個性を大事にした保育が行われている。両幼稚園を比較するとそれぞれの幼稚園の格差が見られる。集団指向か個人指向かでは、A幼稚園では全員が集団指向であったのに対し、B幼稚園では、8人(62%)が集団指向で、3人(23%)が個人指向であった。またA幼稚園では、教師中心の保育観は一人もいなかったが、B幼稚園では、6人(46%)も見られた。

のびのびと育てたいと保護者は考えながらも(A・B両幼稚園ものびのび保育を実施)、安全が最優先されるようになった。子どもの安全重視は当然のことながら、あまりにも行き過ぎると、この時期に必要な経験が不足してしまうことになる。難しい問題である。

【保育記録からの考察】

アンケートの回答に反し、実際の保育場面では保育者中心の保育が見られた。結果を求め設定保育にその傾向が見られると考える。自由遊び時だとまた違った結果になったと思われる。同じ傾向の保育観を持つ保育者同士を比べても、子どもへの接し方は保育者により差が見られた。細かいところまできちんと指導する保育者もいれば、おおらかに接する保育者も見られた。文字には表れないが、しゃべり方、声、早さ、どれ一つとっても同じ保育者はいなくて、それが個性といえるかもしれないが、それぞれの保育者のパーソナリティが子どもに与える影響は大きいと考えられる。保育観とともにその土台にある教師の子どもを見るまなざし、接し方も問われよう。人的環境としての保育者の役割の重要性を感じる。子どもと直接触れ合う保育者の保育観、パーソナリティは重要である。

VI 謝辞

本研究にあたり、アンケート調査及び保育分析にご協力いただいた、幼稚園および幼稚園教諭の皆様にご心より感謝申し上げます。

VII 引用・参考文献

- 1) 梶田正巳 後藤宗理 吉田直子 「保育者の『個人レベルの指導論 (PTT)』の研究」名古屋大学研究紀要 1985
- 2) 中俊博 「保育者の保育観」 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要1996
- 3) 白石崇人 「保育者の専門性とは何か」 2015年発行社会評論社
- 4) 幼稚園教育指導資料第5集 「指導と評価に生かす保育」平成25年7月 文部科学省
- 5) 幼児教育における改定の具体的な方向性 平成28年12月 文部科学省

The difference in nurture behavior by nurture view

Nozomu WATANABE, Yoichi NAGATOSHI

Kyushu Women's Junior College Department of Childhood Care and Education

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kita Kyushu-shi, Fukuoka, 807-8586, Japan

Abstract

As "Education is a person", the role of teachers in education is important. It can be said that the lower the age, the greater the influence. Early childhood education is education to learn through the environment. Kindergarten educational guidelines were announced at the March 2017, but its basic attitude remains unchanged. This study focused on childcare personnel as a human environment and tried to clarify how that nursing care view influenced childcare behavior.